こがれしろかれ　なべてよの　たからはものゝ　かすさせぬ
きみがみたみは　あまつよの　たのしみをこそ　ひゞにまで」
「あめなるわがやを　あふきみれば　なみだもをそれも　さりてすゝまん
はげしきこのよの　あだのうちに　をちくるひやをは　ふせぎてたゝん
かなしみわがみに　あめをふれど　たゞあふきみつゝ　のほるわがや
つゆのうさもなき　あまつみくにゝ　つかれしわがたまは　ながくやすまん」
「かなしみのあらし　うきのなみたつも　のがるゝところは　いのりのいへなり
われらにめくみを　そゞぐ主のまへは　いさよろこばしき　いづこにかもさめん
いのるべきところ　このよにあらずば　あだをさるちから　あめなよろこび」
つみのをもひなき　いのりのいへにて　こゝろにみつるは　かゞやくま
「はなにおける　つゆのたまは　あさひにてり　たゞゆべし
さくおきいで　いさたのしく　かみのみなを　ながかみを
あめつちの　ものみなさ　たゝにまつれ　こにをきけ
なつのあさけ　すゞしきまに　もゝちどりの　たゝゆべし
よのものみな　わがこゝろも　かゞやけるま　ながかみを」
あめつちの　ものみなさ　たゝにまつれ　つよめらる
「ふせぎまもれ　こゝろみを　しのぶことに

おのれにかち　たゝかひて　きみによらば　救はるべし
あしきさもを　たゝずさり　きみのみなさ　なげかして
まことをもて　いさはげみ　きみによらは　救はるべし」
ひのもさなる　このみくにを　かゝりみ　なみかぜなく
いさやすらかに　まもりたまへ　わがかみ
このみくにを　よゝにたかく　たゝせて　きよきすがた
よものうみに　うつしたまへ　わがかみ
あめつちをも　しろしめせる　わがかみ　みちからもて
なをみくにを　まもりたまへ　よゝまで

是をクリスト教文學となす保守舊文學派のものは眉を顰めてしきりに國に害ありとなす吾人の信する處によれは反て日本の害を除くものなりとなす勿論歐洲の風俗政治を咀嚼せすして猥りに施すときは或は害の生するなきにあらず然れとも釋迦を招き歐陽明を容したる日本の風景は日本のクリスト教新文學を生まざるの理あらんや今國民子の示し

たる處を載して余の不文に換ふ

一週日の間に三府を巡見せる外人動もすれば則ち我國を評して曰く日本は如何なる健脚を有すれば三十年の歳月を以て歐米數百年の開化を追はんとするかと彼等は日本を以て開國以來僅かに三十年を經過せしものとなす彼等は日本の歴史既に國民の資額を造り居を知らざるなり我國は文明の大勢力を同化せしめて、我用を爲さしむるを知らざるなり……

……如何んぞ歐西の文明を吸取して不消化病に倒るゝとあらんや……吾人は根本的變革の性質に富みたる宗教の上に於てすら余が國民の同化力を示し得たり佛教の余が國に來る欽明の朝にあり蘇我守屋等宗教の戰爭を爲したるは……是より以往列世の天皇宣教使を發して佛教を天下に講說せしめ刑賞百端宗教の手段一として施されざるはなかりき然とも遂に公卿宮廷の宗教にして國民の宗教たる能はず一時は人をして佛教の宣布に斷念せしめし程なり是れ何の故ぞ是れ其國民的觀察に投する能ざるが故なり詳く言へば國民に同化せざりしが故なり余は已に神を有す我神の外何の要ありて蕃神を拜せざるべからざるか是れ推理力ありとなきを問はず國民の心中に於ける必然の疑なり故に佛教が本地垂跡の說によりて日本の神は佛の權化せるものとなし此疑問を解するまでは渡來一百五十年間至大の勢力を揮ふ能はざりき彼の蘇我氏か守屋に勝つや必ず佛教傳ふべしと思ひしならむ然れとも曖昧進止の間に一百五十年を費して本地垂跡の說によりて日本の神と同化

したる後に於て始めて國民の間に入るを得たるを見ては以て余が國民同化力の至大至剛なるを證すべきなり此時に當りて余か宗教は果して如何なるものなりしか人の死魂を祭り千萬人野に叫ふの宗教のみ高尙なる佛教を同化せしむること如斯米國に一怪樹あり動物の之に觸るゝあるや其枝葉合して動物を卷縮し其血肉を吸ひ枯骨となして後止むと其犬猫たるを獅子たるとを問はざるなり同化力を有するの國民は殆んと此怪樹の如し諸民諸音諸族を問はず之を一切同化せしめて己れの腹を肥さすんば止さるなり云々（國民の友二百五號）

支那文學

支那の文學は二派に區れて互に反目す一派は佛老莊を始とし若くは之と主義を同ふする諸家の說にして、主觀的に道理を觀察し、己と天地とを同一物となし、人生の喜樂辛酸は天地に春夏秋冬あるが如く、隨輪相循少も區別なきものとなす。

性相空寂、　無大無少、　無性無滅、　非往非動、　不進不退、　猶如虛空、　無有二法、　而諸衆生、　虛妄橫計、　是此是彼、是得是失起不善愈造衆惡業、轉廻六趣云云、

故に困難も苦みとするの理なく、喜樂も喜とするの理なしとなす、如此く達觀して確信と滿足とを與ふるに至りたるを佛者覺識と唱へて其奥義を得たるものとなす。華嚴に敎ゆる處即ち是なり、其法性の動機變幻妙致なる、到底深く味ひ難く、永劫無量なるを無量敎に於て之を指揮す、他の二派は客觀的に之を説き主觀的に之を察す、天地を道理命の本源となし萬物は之によりて成り、人間を以て萬物の靈となし、法し處にして、之を王道又は天道の道となす、此文學の示す處は萬事軌命の示す處に從ふを人間の道となす。禹陶文武周公孔子子思子等の説も模を天則に則り、天の命するを物の性と云ひ、性に從ふを以て之を道と云ひ、此道を修むるを以て人間の敎となす、此道は萬物と人間と尤も密接にして須臾も離るべからざるを要となす、此説は前派よりは平易にして致味又濃厚なれば俗人に學ひ易くして又人を化するの力强し。

故に困難も苦みとするの理なく、喜樂も喜とするの理なしとなす、如此く達觀して確信と滿足とを與ふるに至りたるを佛者覺識と唱へて其奥義を得たるものとなす。華嚴に敎ゆる處即ち是なり、其法性の動機變幻妙致なる、到底深く味ひ難く、永劫無量なるを無量敎に於て之を指揮す、他の二派は客觀的に之を導き主觀的に之を察す、天地を道理の本源となし萬物は之によりて成り、人間を以て萬物の靈となし、法命の示す處に從ふを人間の道となす。禹陶文武周公孔子孟子等の說き し處にして、之を王道又は天道の道となす、此文學の示す處は萬事軌模を天則に則り、天の命するを物の性と云ひ、性に從ふを以て之を道と云ひ、此道を修むるを以て人間の敎となす、此道は萬物と人間と尤密接にして須臾も離るべからざるを要となす、此說は前派よりは平易にして致味又濃厚なれは俗人に學ひ易くして又人を化するの力强し。

前者は萬事を理性に訴へて萬事を無に歸し、後者は情性を通して理性を發せしむる實理的文學なり。佛者は其說の人を化するに欠けたるを識り後に至り方便說を設けて性情を引き出し、假定的安心を與ふるに至れり、是によりて或は靈性を危逸なる誤りに發動せしめ比喩を以て實在物なるか如く認識せしむるに至れり、此の文學に妙機ある處は無量なる哲理を至つて誇大なる比喩を以て示し人生の美性を快抉して理性に繫ぎ想像力を發育して華美なる美術的文學を方便のうちに發達するに至れり、今普覲敎に表はれたる一例を揭く、讀者の便を思り日本文に譯す、

普覲菩薩は身邊無量、音聲無邊、色像又無邊なり、此の國に來らんと欲して自在に神通に入り、身を促めて小さならしめ、知慧力を以て化して白象に乘れり、其象六牙あり、七支地を跏へて七蓮花を生せり、其色鮮白白中に上昇するものなり、頗梨寶山も化を爲すを得す、身の長け四百五十有旬、高さ四百有旬なり。六牙の端に於て六浴池あり、各浴池の中

に十四の蓮花を生ず、池と正等なり、其華開敷せること天樹の王の如し、各花の上輪に一王女あり、顏色紅の如くして天女に過ぎて暉る、手の内自然に五箜篌を化せり、一一の篌に五百の樂器ありて音調たり、五百の鳥鬼龍雷雲皆茎實の色にして蓮葉の間に生せり、象の鼻に華あり、其色赤眞朱の如く金色にして含んで未だ敷かず、……至心聽受して大乘を思惟すると休廢せざれば華即ち敷き、金色に金光輝く、其蓮花臺は是れ毒叔迦寶妙荒聚尼にして以て華臺となし金剛寶を莖鬚となせり、北拘蘇摩臺に坐し衆多の菩薩蓮華座に坐せり化佛の眉間より又金光を出だして象の鼻中に入る、象の腹中に入る、象の頂上を繞して化して金臺となる、象の腹中より出でて、耳中に入る、象の鼻より出でて、象の頂上を繞して化して金臺となる、象の頭上にありて三化人あり、一は金輪を持ち、一は金剛杵を執る、杵を擎げて象を讃するに象踊ち能く歩行す、地を離ること七尺、地に印文あり、印文中に於て千瓣の蓮網茎の足を具せり、一一の網間に一大蓮花を生ず、此蓮華の上に一の化象を生ぜり、赤七支ありて大象に從從せり、象の鼻は蓮華の色なる上に化佛ありて眉間の光を放つ、其光金色にして前の如く、象の鼻中に入り出でて、象の口腹中に入り、象眼より還りて象耳に入り、象耳より出でて頂上に至る、漸漸上りて象背に至る、化して金臺となりて七寶欄具せり、樹の四面に於て七寶の柱あり、衆寶帷帳を以て覆蓋となせり、象中に七寶の蓮華あり、其蓮花臺は是れ大龍尼なり、一りの菩薩ありて紫磨黃金を、名けて普賢と曰ふ、身は白玉の色にして五十種

の光あり、光りに五十種の色あり以て頂光となし、身の諸の毛孔より金色を流出す、其金光の端に無量の化佛有まして諸化の菩薩を以て眷屬となせり、云々……

又隨輪相循説の一斑を示せは無量經に於て

大なるかな大悟大聖主、垢なく、染なく、所著なき天人……、意滅し、識亡して心亦寂なり、其身は有にあらず、無にあらず、因にあらず緣にあらず、自他にあらず方にあらず、圓にあらず長短にあらず、出にあらず沒にあらず、生滅にあらず非造非起爲作にあらず、非坐非臥行住にあらず、動にあらず靜にあらず、閑靜にあらず、進にあらず退にあらず、安危にあらず、是にあらず非にあらず、得失にあらず、非青非黃、赤白にあらず……三昧六通道品より發し、衆生菩薩因緣より起る、……實には相非相色なし、無相の相にして有相の身なり、衆生身相の相も亦然なり、又曰く諸法四相の義は苦の義、空の義無常無我無大無小、無生無滅、一相に相なく、法性法相、本來空寂、來らず去らず、出でず沒せず云々。

老莊の説は心無なれは衆妙の道理宿り、之を有相とするときは道理に離るゝと説けり、故に大德は德ならず、最善は善ならずと云ひ、之を例解するに家室の人間を住せしむるは坐敷の空なる處にして柱及ひ戶

障子は人の躰を容れずと云へり、莊子の說は有性と無相とは互に同じき故に衆理虛を理の相となせり、(齊物篇)如斯き文學に甘んずるものは情を淡味ならしめて社會の雜務に厭滯し、己れを全ふするのみにして其他を顧みざるに至る、意の向ふ處遂に佛の敎理と合し、厭世的文學を出するに至る、儒敎の流れは明德を明にするを以て事務となし、道を遠に覓めずして之を經驗と希望とのうちに求め、天によりて人生の雜事を處便することを務む、佛敎の方便の調によりて情の餘命を全ふしたるもの之と或は合し社會に活動的文學の一流を出すに至れり。

歐洲文學

歐洲の文學は其源を二泉源より發す、一派はギリシヤ、ラテンの古典より起し、一はユダヤ文學の系統に發達す、英佛の美術的文學はローマ、ギリシヤ、ラテン、の流れに發達せる處多し。其熱力はユダヤ文

學の流動に劣る、米國に至りては全くユダヤ文學の情熱にのみ心醉し之を名けて正理派となし其他のものを邪說派となす、獨乙國は此兩派を兼ね至りて自由にして加ふるに支那文學を混合せり、歐洲文界の淵にして文美婉艶四表に流動す、カントの如きヘーゲルの如きはラテンの流れを表はし、シルレル、ゲーテーの如きはギリシヤ、ユダヤ、の系統を多く流す、レッシング、シエペルハウェルの如きは暗約して東洋の哲學に類す、近代に至りシユライヘルマヅヘル、ブフライデレル等の學者起り眼光を宇內に放ち達觀せる新說を起し其論鋒隱見覆沒詳知し難しと雖も宇宙的歸一說にかたむき歐洲の固息文學を切倒せんとせり、文界の潮流如斯なるか故に自ら爰に保守派自由派を生じ、互に樑樞して以て又文界に化合的新生命を生じ二十世紀に命約せる文學の芳芽を萠すに至れり。

歐洲の文學思想の大班を示せば

眠る心はみくにになり、　見ゆる形はおほろなり。　あすはあすなれ今日ばかり、
あわれはかなきものぞかし、　なぞさあはれに云はあし。　我が生命こそまことなれ、
肉はちりえさ別るれど。　是はからだのうへのこと、　人の願はのみ喰か。
人の願は是ならず、　只怠らず働きて。　喜びぐれにたくわえて、
たのしく暮すことにあり、　此身をよせて先がけに、　なりて益々すゝむべし、
用なきものとなる勿れ、　如何に未來はたのしくも、　此の世のたのしみ通ふらでは、
とてもゆかまゝそのみくに、　神を忘れずわれを知り、　はたらくべきは今日ばかり、
たのしむべきこと世に多し、　喜ぶべきこと又多し、　勉め勵めば得るならむ、
赤心あらば見るならむ、　海より荒き世の中に、　波間に漂ふ捨小舟、
波に浮ばゝ渡るらむ、　波に向はゞ沈むらめ、　さすれば錨を用意して、
心靈して機を知りて、　神にたよりて祈りして、　如何なる逆もこゝゝせず、
高きに至れいそしめよ、　たのしみあるぞいそしめよ、

ユダヤ文學とギリシヤ文學と調和せられて發達せし文學理想の流れし淵源の一班を示せば、

大初に道あり道は神と偕にあり道は則ち神なり　この道は大初に神と偕に在りき萬物これに由て造らる造られたる者に一として之に由らで造られしはなし之に生あり此生は人の光なり光は暗に照り暗は之を曉らざりき

ユダヤ文學思想の淵源の一班を示せば

心に謀るところは人にあり舌の答へはエホバより出づ　人の途はおのれの目にことゝく潔しと見ゆ惟エホバ靈魂をはかりたまふなんぢの作爲をエホバに託せよさらば汝の謀るところ必ず成るべし　エホバはすべての物をおの〳〵その用のために造り惡人をも惡き日の爲に造りたまへりすべて心たかふる者はエホバに惡まれ手に手をあはするとも罰をまぬかれず　憐憫と眞實とにより て愆は贖はるエホバを畏るゝことによりて人惡を離るエホバもし人の途を喜ばゞその人の敵をも之と和がしむべし義によりて得たるところの僅少なる物は不義によりて得たる多くの資財にまさる人は心におのれの途を考へはかるされどその歩履を導くものはエホバなり智慧を得るは金をうるよりも更に善ちすや聰明を得るは銀を得るよりも望ましい惡を離るゝは直き人の道なり おのれの道を守るは靈魂を守るなり驕傲は滅亡にさきだち誇る心は傾跌にさきたつ卑き者に交りて謙たるは驕ふる者と偕にありて獲物を分つにまさるエホバに倚頼むものは福なり心に智慧あれば哲學と稱へらるくちびる甘ければ人の智識をます明哲はこれを持つものに生命の泉となる愚なる者をいましむる者はおのれの

愚是なり智慧ある者の心はおのれの口をかし（又おのれの口唇に知識をますこゝろよき言は蜂蜜の如くにして靈魂に甘く骨に良藥となる人の自ら見て正しとする途にして終はつひに死に至る途となるものあり勞する者は飲食のために骨なる是その口己れに迫ればなり邪曲なる人は惡を掘るその口唇には烈しき火の如きものあり偽る者はあらそひを起しつげくちする者は朋友を離れしむ強暴人はその隣をいさなひ之を善からざる途にみちびくその目を閉ぢて惡を謀りその口唇を慎めて惡事を成遂く白髮は榮の冠弁なり正義しき道にて之を見ん惡を遂くする者は勇士に勝りおのれの心を治むる者は城を攻取る者に勝る人は籤をひくされど事を定むるは全くエホバにあり

ラテン文學理想の歐洲（流れ來りし淵源の一斑を譯出すれば

宇宙のことは彼是の、別を論ぜず諸共に、理法のなきはあらぬかし、天に光れる星月や、地に生び出つる動植や、是等を樂む人間も、皆諸共に一串の、道を通して出つるなり、心無してなかむれは、人も草木も獸類も、空かけりゆく鳥類も、こゝろを持たぬものはなし、其又心に強弱の、別はあれども皆共に、全し理法の生き死にぞ、先はあるやらあらぬやら、元きし道に歸るやら、其又道は如何樣の、ものであるやら知られども、兎に角物は理に出て、又此理にぞ歸るらめ、……

文學の調停

文學ありて社會あるにあらず、社會ありて文學あるものなり、社會ありて人間あるにあらず、人間ありて社會あるものなり、社會は人によりて成り、人は文學によりて其責任を全ふす。人文學を離れて思想なり難き如く、文學も亦人間を離れては、花蕾綻びさるものなり、人の文學に於るは恰も魚の鰭に於けるが如し、人文學の幾淵に泳ぎ、文學は人の思想を通して浮び出つるものなり。魚能く鰭を持つと雖も水を離れては鰭を用ひ難し、水と魚に於けるは文學と天地に於けるが如し、天地あり、社會あり、此間に人ありて始て文學を草す、此天地人の三遇は實に是眞實なる文學の父母なり、眞實の文學によりて眞實の人起り、眞實の人を通して眞實の文學生る、人天地より離れ難く、文學亦

人より離れて社會の外に立つの用なし、合循連帶其關係の密なると恰も父輪の相關係する然如し。

知性ありて本性あるにあらず、本性の命によりて知識は發達するものなり、本性を經ざるの知識は不完全なる感覺にして社會に油するの良知にあらず、情性ありて本性あるにあらず、本性ありて情性あるものなり、本性の命を經ざるの情動は亂雜なる發動をなし、知識を油するの良情にあらず、良知なくして良情起る術なく、良知なくして知識機に働くの敏なし、良情の起る術なく良知機に働くの敏なくして完全なる思想起るの所以なし、完全なる思想起らずして天地を解したるものなく、人を知りたるものなく、社會を識りたるものなし、天地を解せず、人を知らず、社會を識らざるものは、完全なる文學を起すとなし、宙に起すとなきのみならず、文學の何たるを知るとをも了識するとを

得ざるものなり。

文學人と調和を失ひ獨り一隅に隱れて光明なく、人も亦文學を味ふの生命なく、獨り呻吟して中夜に泣く、文仙天地に羅列し人を招くと雖も人之に應して門戸を開かざれば强て來らず、人之に應すると雖も其應ずべき資格なきものは應ずるのみにして益なし、宙に益なきのみならず反て其身を害するに至るものなり、文學者は偏理を玩弄び純正の道理を以て指導せず、若し導くとすれは高尚に失して只一隅の人に適するのみ、社會は罪惡に沈論して目前の活路に苦み、道を忘れて愈々道を識るに至る、之に應するの資格なきは資格なきものゝ怠りなり、道理を忘れて道理を識るは識るものゝ罪なり、猥りに偏理に甘醉し或は高尚に失するは偏理に失し高尚に失したるものゝ不注意なり、不注意の起るは信實なきを以てなり、高尚に失するは社會を愛せざるなり、

論理に意張り立つるは普通の文識を畜へざればなり、譏りて罪を招くは道を愛せざるの天刑なり、怠りて資格なきものとなるは自ら招く馬鹿なり、馬鹿となり、天刑を招き、普通の文識を備へず、信實なく、社會を愛せざる普人生の本性にあらざるなり、人生の本性を欠きたるものは天則に則らざるものなり、天則に則らずして社會を知り、己を知り、境遇を知り、物の接合を知り、人情を知り、知性を知り、人生に適合せる文學を草することを得んや。

彼等は天則を愛せざるにあらず、天地を嗜好するの本性を失へばなり、彼等は本性の完からんことを欲せざるにあらず、然れども如何にして完からんか術數殆んど盡果たり、彼等は謹愼家となり、普通の博識を得し、卓觀せる觀察を具備することを好まざるにあらず、然れども如何にして博識に觀察し、如何にして不正義より離るべきか思術殆んど枯れ

盡くせり、若し爰に不正義をして正義家となし、偏理家をして達觀となし、本性を道理に接合せしめて博識となし、達觀となし、天則に到らしむる術でありとせば、是れ萬障を除却して考究せざるべからざる急務なり。

天地の顯象は知識的の性を多く發揚し、義人君子の血涙は惰者をして勇奮せしめて道德的情性を感發せしむ、天地道德性を發揚すべき神氣なきにあらず、只墮落せる人生は天地の顯象に親しく接吻するを得ざれはなり、山水の明媚、知情を流さざるにあらず、然れども人間の知情より遙に劣るものなり、啻に劣るのみならず道德的の生命は全くなきものなり、獨り人間に至りては天地の法則を充し、靈を有し、知を有し、愛を有し、正義公道の靈命を有す。法則を充したるものは不法の改良せられん爲に身を盡し、雜事を明察し神氣慄然人を畏服し正義公

道を有するものなり、愛を有するものは人の爲に寛忍をなし、人のために益をなし、妬まず、誇らず、驕らず、非禮を行はず、利私のみに進まず、輕々しく怒らず、不義を喜ばず、凡そ事包容み、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事忍び、憐恤者の爲に涙を流し、不正の爲に血を灑ぎ、不義者を救ふ爲に献身し、社會の不調和を悲み、人の道より離れしを歎き、人生の本性を甦發し、博識を與へ、觀察を與へ、勇氣を與へ、忍耐を與へ、雅量を與へ、歡を與へ、正義公道天眞の生命を與へて、達觀家となし、博識家となし、本性を有する神人となし、圓滿無量の樂園に救ひ出さんとして勇奮して不義の爲に九嶽の苦極を永續せらるゝも其氣節を掘かざるものなり、其義節は舊張して四境に猛溢し、其仁愛は萬難を解溶きて快情の東天に近つかしむ、靈泉となりて干燥界を濕し、靈光となりて暗界を輝し、新生命となりて陰雲たる死塊を

活動せしむ、茲に於てか惰者は奮勵し、不義者は義あるを知り、姦佞其處に安んぜずして義界に旅立を始むるに至る、久しく俗塵に葬られし知情は靈泉に濕はされ、靈光に照され思々懺悔茲に始めて人生の大問題を識得し、社會を覺り、天地を知り、己れの如何なるものなるかを氷解するに至る、人生を識りたる眼光を以て人生を察せば人生の過失を生ずるとなし、己れの如何なるを知りて社會に立たば其接合を失策に過つとなし、天地の如何なるものなるを達得したるものは天地の法則を嗜まざらんと欲するも得べからざるなり、天地を達觀して天地を達觀したる人の文藻を讀み、人生を覺りて人生の活る問題を解說す感する處、思ふ處、進む處、退く處、爲す處、止む處、百情三知、其軌に則らざるなし、百情三知公義公道に依りて進まば爲すものとして成らざるなく、思ふ處として正ならざるなく、感ずる處として愉快な

らざるはなし、則ち是れ天地を知らしめ、本性を識らしめ、博識となし、卓觀家となし、天則に則らしむる處の生命なり、吾人如斯き義聖者の起らんことを望む者なり、若し起らざるならば如斯大聖の靈命を干藻せる社會に繫がんことを渴望して置かざるなり是れ文學と人生と調和せしむるの秘機吾人は他に求むるを得べからざるなり、之に仍りて文學家たらば眞正の文學者たらん、之に仍りて文學を味はゝ其趣味腦裡に溢れざるなし、求道者も、勢役者も、義に勇み、道に進み、己れを知り、人生を識り、社會を覺し、天地を觀察し、其適合を誤らざれば何んぞ文學と人間と調和せさるの理あらんや。

自然の文學に關る調和

完成せるものは完美なる外觀を與ふ、不完全なるものは完全なるものを需む、天地の法則は完全なるものたり、山海動植は法則を完滿して

出つるものなり、故に天地の外觀は審美を示す、蒼天の星辰、深山の泉、涎々たる群鳥、牝獐の子を愛するのさま、婉艷なる嬰兒の笑顏、俗人と雖も之に對して喜悅の情を促かさゞるものなし、既に喜悅の情を起す是れ美に應化じたるの時なり、喜の爲には困難も意とせず、朝起をなし、忍耐を爲し、希望を生し、棘達を生し、彼岸の審美と同化せざれば其樂より離れ難きものなり、浦島太郎の如きは山水の美を求めたるものなり、西行の如きは天地の美に招かれて銀猫を忘れたるものなり、怒聲眉を顰むる不調和の家庭も愛子一笑の美情に困苦を意とせざるものなり、常盤御前の如きは此の美に招れて身を全ふしたるものなり、山水に招かれたるものは山水に終り、天地に招かれたるものは天地に活歩す、情の美に接したるものは情中に理性を全ふするものなり、此喜ひを詩に詠じ、此美情を文に章せば、天地に接り、困難に

進退を辨じ難きもの又能く其機を辨す、其機を識り其情を探りて又完全なる審美に接すれば流れて泉となり、河となり、圓滿喜樂の彼岸に達する難きにあらざるなり。

音樂の文學に關する調和

眼を通して天地の理法を認識する是を觀察と云ひ、其快味なる感情を美と云ひ、耳門を通り音聲となりて認識する是れを音樂と云ふ、風雷海波の怒號、皆々たる小鳥の音聲、悲哀なる蟲聲、六律六呂の和聲、皆天音の生命を送るものなり、人を笑はしめ、或は泣かしめ、或は怒らしむ、起坐進退人生を自由に支配する自在力を有するものなり、敦盛をして青羽の笛を死出の遺產に殘さしめ、信玄をして生命を之に奉ずるに至れり、其他蟲聲に風雷に人生のさとりを促かさるゝもの幾人なるかを知らざるなり、之を利用して戰爭に用ひ、祝會に用ひ、敎會

に用ひ、危險なる情の發動を理性に調和して人生の識りに媒介せざるものなし、嗚呼音樂の聲能夫れ偉ならずや。

義人血涙の文字に關する調和

出師表を讀んで涙を流さゝるもの其人にあらず、佐倉宗五郎の血涙に望んで節義の情を起さゝるもの人性にあらず、人は學問を修めざるも普通の道理は經驗によりて保つものなり、理性には或は乏しき處あるも節義の血涙に灑かれては濃厚なる情の發動は暗節して理性を完全に敏動せしむるものなり、世には理想を持つもの至て少し、世には學理に通曉したる者又少し、文學の目的は少數の者に道理を識らしむるものにあらず、全社會を平等に導かん職務なり、全人類を道に進めんが爲なり、全人類を敎ゆるには全人類の感し得べき方法を覓むるを要す、近時二三の文學者は義人の血涙を以て理想界を調和せんとせらるゝを

謝す、地方の爲に涙を流したる義人は地方の人に涙を流さしめ、一國の爲に涙を流したる義人は一國民に涙を流さしめ、全宇宙を激動し得べき憤慨なる血涙を絞りたるものは全宇宙の理想を支配するものなり吾人は余が枯死せんとする理想に最氣焔ある血涙を以て生命を與へられんとは希望に堪へざるなり。

宗教の文學に關する調和

前半世は知識を需め後半世は靈魂の安を覓む、是れ性情と歴史の示す通理なり、前半世は破壞的の時代にして後半世は建設の時代なり、此の故に知識の最終は靈界に渡り靈知は流れて事理を建設するものなり最終の知識を講じ建設的の安逸を導く、宗教の勢力ある所以爰に察せらるべきなり、夫れ宗教は事業に失望せるものを勵まし、困難なるものを助け、諸能力の主府なる靈想の苦悶せしものに快樂を與ふるもの

なり、(余の爰に宗教と唱ふるは人情と理性とを兼備せるものにして如何なる社會にも適し得べき天啓の調和力を有するものにより道理と人間と密接せられんことを渴望して調和力の助勢によりて其調和せらるゝ方法に熱望する有志の集合体を云ふ) 所によりて志節を養ひ、音樂によりて高雅の美性を養成し、演舌に仍りて人の經驗を示され、失望なく、困苦なく、煩悶なく、愉快のうちに能力を發達するものなり、」文學働きて宗教を起すにあらず宗教反て文學を起すものなり、宗教盛んなれば文學美術盛んに起り、宗教衰頽すれは文學美術隨て廢たる、エヅプト、ギリシヤ、ローマの文學美術、奈良、足利、德川の文學、支那に於ける、印度に於ける、歐洲の文明に於ける、皆宗教の生命に由りて發達せさるものあらさるなり、眞正の美術家、眞正の文學者、眞正の哲學者に宗教の感念なくして發達せしもの一人もあらず、ソク

ラテースの如く、ゲーテーの如く、シルレルの如き、馬琴の如き、紫式部の如き、皆此思想の門戸を經さるもの一人もあらさるなり、田夫無知一介の賤民も之によりて文學者となり預言者となり英傑となりたるもの幾人なるかを知らさるなり、馬太の如きヨハヂの如きアンデレの如き王郎の如き皆此思想に浴せしものなり、此の宗教は眞正の學者を起し、貴賤賢愚少も偏するなくして快活のうちに高雅逸美の思想を天外より呼下して人生に階しする調和の生命なり。

美妙後篇 終

明治二十九年一月十七日印刷
仝　年一月二十一日發行

定價二十錢

著者兼發行者　大月隆　東京神田錦町一丁目八番地
發兌元　文學仝志會　東京神田錦町一丁目八番地
印刷者　佐久間衡治　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

版權所有

大賣捌所　開新堂、東京堂、十字屋、有明堂
上原書店、中西屋、有斐閣

文學仝志會々則

余が會の目的は東西の文學を調和して日本の新文學理想を起し實業と文學の調和文學と諸科學の歸一する所の妙理を發表し余が國をして實地と理想と相伴へる處となし進んでは東西を教化し得べき純正圓滿の光明を吾が同朋のうちより世界に向ひて發するにあり余が會は社會より寄送する文章詩歌演藝記小說經文比喩文譯文俳諧等を集め紙數二百頁以上に集まるときは之を會員文學集となして出版し正員及ひ愛讀者に配布す

吾が會に賛假として一ヶ年に三十錢納むるものを正員となし其時の市價を出して購ふものを客員となす然して正員は政治を除くの外何事にても著者を招きて質問するの權を有す

吾が會は文學の責任を盡さんとして立ちたるものなれは如何なる困難あるも會員に迷惑を負はしむることを得す又賛假以外の金を集むる事を得す又賛假十五錢以上の書を出さす

吾會員として二ヶ年以上正員名簿に記したるものにして若し圖らずも不幸の位置に陷りたるときは本會は可成其人の生業を扶助すべし

吾が會は本會の目的を贊成し困苦を辭せずして文學に專任せんとする志願者あるときは會は相當の衣食住を給して本會の事務專任者の一人となすべし

吾會は正員一萬人に充つるときは世界有名の五大經書を集輯し普通人に讀み得るものとなして發表すべし余が會の出版は文學部賛業部家庭部會員文學集部と順次一ヶ年に二回出版をなす

大月隆生編纂

再版

家家の憲法

國に憲法なきときは其國紊れ
一家に規律なきときは其家破

る余が家庭は新憲法の制定により舊慣を寸斷に破壞せられたり今に於て之に供ふ處の家の規定を示さゝれば余が家庭の前途望なきを知る大項目は家憲の公則●世界百傑の哲言一萬言●貝原益軒の家憲●日本老商の經驗●蜀山人の家憲●ロッチャイルドの家憲●プラヲンの憲●道歌一百集●熊澤蕃山の家憲●學問を知らぬものゝ心得●家政の注意●日本通俗の金言(定價貳拾錢郵稅四錢)

東京神田表神保町二番地

開新堂

文學全志會々則

余が會の目的は東西の文學を調和して日本の新文學理想を起し實業と文學の調和文學と諸科學の歸一する所の妙理を發表し余が國をして實地と理想と相伴へる處となし進んでは東西を教化し得べき純正圓滿の光明を吾が同朋のうちより世界に向ひて發するにあり余が會は社會より寄送する文章詩歌演藝記小說經文比喩文譯文俳諧等を集め紙數二百頁以上に集まるときは之を會員文學集となして出版し正員及ひ愛讀者に配布す

吾が會に賃假として一ヶ年に三十錢納むるものを正員となし其時の市價を出して購ふものを客員となす然して正員は政治を除くの外何事にても著者を招きて質問するの權を有す

吾が會は文學の責任を盡さんとして立ちたるものなれは如何なる困難あるも會員に迷惑を負はしむることを得す又賃假十五錢以上の書を出さす

吾會員として二ヶ年以上正員名簿に記したるものにして若し國ちずも不幸の位置に陷りたるときは本會は可成其人の生業を扶助すべし

吾が會は本會の目的を贊成し困苦を辭せずして文學に專任せんとする志願者あるときは會は相當の衣食住を給して本會の事務專任者の一人となすべし

吾會は正員一萬人に充つるときは世界有名の五大經書を集輯し普通人に讀み得るものとなして發表すべし余が會の出版は文學部實業部家庭部會員文學集部と順次一ヶ年に二回出版をなす

大月隆先生編纂

再版

家家の憲法

國に憲法なきときは其國紊れ
一家に規律なきときは其家破

る余が家庭は新憲法の制定により舊慣を寸斷に破壞せられたり今に於て之に供ふ處の家の規定を示さゞれば余が家庭の前途望なきを知る大項目は家憲の公則●世界百傑の哲言一萬言●貝原益軒の家憲●日本老商の經驗●蜀山人の家憲●ロッチヤイルドの家憲●ブラヲンの憲●道歌一百集●熊澤蕃山の家憲●學問を知らぬものゝ心得●家政の注意●日本通俗の金言(定價貳拾錢郵稅四錢)

東京神田表神保町二番地

開新堂

大月隆編著

十二版

家の寶

本書一版は昨年六月今日迄十二版を重ね部數壹萬八千部を出せり

現今幾多の便利なる書多しと雖も本書の右に出づるものはなし大項目は一家の組織◎一家の經濟◎煮炊の心得◎日本上中下料理◎西洋料理●食物を貯ふる法◎家の仕事◎洗濯の心得◎化粧の秘事◎挿花の奥義●看病法◎小兒の養育方◎交際の秘儀◎應接の禮式◎養蠶の心得◎家畜の飼方◎男女貧富詩人學者文人不平家等の心得◎現今實用の諸規則數十件◎民間治療法◎細項目二百廿其他にあり（定價拾五錢郵便貳錢）

東京神田錦町一丁目

文學同志會

71
54

084802-000-4

71-54

美妙

大月　隆／著

M29

DBA-0147